

【シャーロック・ホームズの名状し難い冒険】

◆◆◆ 目次 ◆◆◆

●はじめに … 4.

【ハドスン夫人のチェシャ猫】

1. 奇妙な訪問客 … 6.
2. 予期し得る犯罪 … 24.
3. ミダス王の館 … 36.
4. 永遠の秘密 … 51.

【クトゥルフの咆哮】

1. 明かされざる事件たち … 60.
2. ふたつの密室殺人 … 62.
3. フランシス・ドレイク号 … 69.
4. 衣装箱の謎 … 75.
5. 奇妙な印 … 85.
6. 尾行者 … 91.
7. ヘンリー・アーミテッジ教授 … 98.
8. キングストンの報告 … 106.
9. 怪文書 … 117.
10. 深更の襲撃 … 125.
11. オランダ人の遺書 … 135.
12. 追跡 … 141.
13. ディオゲネス・クラブ … 150.
14. ブラック・フライデー号 … 160.
15. 出撃 … 165.
16. セント・チルダ島 … 177.
17. 深きものども … 186.
18. クトゥルフ現わる … 192.
19. 反撃 … 199.
20. 大団円 … 208.

【水晶の卵の謎】

1. 珍しい水晶 … 211.
2. 観察 … 225.
3. ジェイコブ・ウェース氏 … 233.
4. 火星人の目的 … 244.
5. ボリ・クニ王子 … 254.

6. おかしな置き土産 …264.

●あとがき …268.

●はじめに



シャーロック・ホームズ氏とその盟友ジョン・ワトソン博士の冒険譚を知らぬ者はほとんどいないだろう。

彼独特の思考法と行動力は、近代の犯罪捜査に決定的な影響を与えたが、同時に世界中の読者——地元英国はおろか、フランス・イタリア・アメリカ・ロシア、果ては極東に至るまで——を楽しませている。彼らの活躍が世紀を重ねても老若男女の支持を広く得ているのは、誠に驚くべきことだ。

さて、彼らは独自の倫理観に基づき、事件に関して慎重な態度を貫いたのは周知のとおりである。

公表された事件簿は、おびただしい記録から考え抜かれたすえに抜粋されたもので、それらも登場人物の名前や事件のあった場所・年代を含め、当事者以外思い当たる節がないよう書き直されている。残念ながら、我々が目にすることができるのは氷山の一角に過ぎない。大半はブリキの書類箱へ納められ、さる筋によって嚴重に保管されている。

ところが今日、どういう経緯を辿ったものか、ワトソン博士の秘匿された記録が世界のあちらこちらから公表されるようになってきた。その数は数千におよぶと言われ、明らかに子供向けのパロディや贋作といったものから、本物と太鼓判を押されたものまで、すべてを把握するのは不可能といってもいい。

今回、読者の方々へ提示することになった新たな事件簿もその中のひとつである。

【シャーロック・ホームズの名状し難い冒険】と銘打った一連の冒険譚が、はたしてワトソン博士の筆を経たものかどうか分からぬが、原典以外の刺激に飢えている読者の需要をわずかながら満たせると踏んで、巷に提供する次第である。

なお、この事件簿が極東の国日本の翻訳者によるもので、ワトソン博士の記憶違いか、あるいは訳者の技量不足による——断然後者だと思っただが——記述ミスがたびたび散見されるが、なにとぞ読者のご寛恕を乞う。

【ハドスン夫人のチェシヤ猫】

1. 奇妙な訪問客

シャーロック・ホームズは徹頭徹尾理性的な人間で、およそ激情とか迷信とか、論理的な思考を乱すものを忌み嫌っている。いわば彼は科学精神の申し子で、恋愛ですら遠ざける鉄の心を持っていた。

「なあ、ワトソン、我々が魔女狩りの時代にいたら、どれだけの悲劇を救えただろうね」
ある日ホームズはしみじみと言った。

「およそ迷信などは根拠のない思い込みから生じるものだが、真の恐ろしさは、ただの思い付きを極端な理屈で武装させることだ。しばしば人間は根も葉もない噂を正論にまで押し上げてしまう。あげく、意味のない殺人が横行するわけだ。それこそ論理的思考の欠片もない、人間の奥底に潜む名状し難い衝動に憑き動かされて。

まったく、人間の精神ほど不可解なものはないな」

1898年のことだが、我々は例の霧によってベーカー街221Bに閉じ込められている。窓の外には黄色い霧が渦巻き、薄汚れた茶色の雫の跡をガラスに引いている。今は真っ昼間だというのに、あまりに室内が薄暗いのでランプを点けて新聞を読んでいるくらいだ。

ホームズは『魔女の鉄槌』と題された本をサイドテーブルへ投げ出し、両手を頭の後ろに組んでパイプを吸っていた。

「君がそんな本に興味を持つとはね」

「なに、エリザベス女王の時代にも科学的捜査が行われているのか確かめてみようと思っただけさ。案の定ガラクタだ」

「魔女や魔法は空想の産物だと言いたいのだろう」

「ぜんぜん根拠のないことでもない。彼女らは経験的な知恵を持っていて、それらを駆使することが出来た。そいつがいわゆる魔法の正体だ。だが、キリスト教的権威を押し付けたい者にとっては邪魔以外の何物でもなかった...いつの時代でも真相より権力が第一の動機というわけだ」

辛辣な口調で盛んに煙を吐いている。このところ興味を惹かれる事件もないし、霧に閉じ込められてイライラが高じているらしい。そういうわたしも朝から晩まで新聞と睨めつ

こで飽き飽きしていた。事が起こるのは、えてしてそういう時だ。

表の通りから微かに足音がした。霧のせいで馬車が途絶えたので聞こえたらしい。

「おや、訪問者か」

呼び鈴を鳴らす前からホームズは居ずまいを正していた。

「どうしてわかる」

「足音を聞かなかったのか？通り過ぎてからまた戻り、しばらく音がしなかった。迷っているようだな」

銀盆に名刺を載せて上がってきたハドスン夫人は、何か妙な物を見た、という感じで眉をひそめていた。

「ハドスンさん、変わった人物らしいですね」

「ええ、それが、なんていうんでしょう、覆面強盗のような——いえ、紳士だとは思うのだけれど——お方で！あんな人は初めてです」

「それは歓迎だ」

両手をこすり合わせ、ホームズは叫んだ。

「さあ、お通して下さい。——ワトソン、助かったな、どうやら面白い事件らしい。退屈に殺される前で良かった」

階下から上がってきたのは、ハドスン夫人が言ったとおりの人物だった。確かに、これほど奇妙な人間はいまだお目に掛かったことがない。

ヌウッとドアをくぐって現れたのは、ほっそりした長身の男だった。今が夏だということに黒のレインコートを羽織り、薄汚れた白い手袋をはめ、首元をマフラーで厚く保護している。マフラーは顎の部分にまで達し、鼻から上だけしか見えなかった。その顔も黒い大縁の色眼鏡と、目深に被ったシルクハットでほとんど影になっている。ほんのわずかな隙間から垣間見ると、顔色は青白く、おかしくらい無表情だ。

細身のステッキと小さな鞆を持って仁王立ちする様は、さしずめ烏の嘴のようなペストマスクを被った中世の医者だった。



「許しを乞わねばなりません」

口元をマフラーで覆っているせいで、男の声はくぐもっていた。年齢もはっきりしないが、落ち着いた声音といい鷹揚な態度といい教養を感じさせる。

「わたしは常時この格好です。人前に入る時も帽子を脱がないのです。不快に思われることですが、あらかじめ失礼を言わせていただきます」

「どうぞお掛け下さい」

慇懃にホームズは席を勧めた。すでにその眼は半眼になりかかっている、異様な風体の男を見つめる瞳は輝いていた。

「この忌まわしい霧を突いて出向かれたということは、あなたにとって火急の要件なんでしょうな」

「まったくそのとおりで」

マフラーの男は悠揚迫らざる物腰で椅子に座ったが、声は微かに震えている。

「わたしにとって...いや、おそらく、全土の英国市民にとって非常に重大な事が起こりつつあります。この問題が解決しない暁には、迷宮入りの事件が立て続けに出ることでしょう」

「まだ事は起こっていないと？」

「いずれそうなります」

「大変急いで来られたようですが、雨は降っていたのですか」

「地元ではね」

「ほう。どちらにお住まいで」

「それは言えません。ついでに申し上げるが、わたしの名前も身分も一切明かすことは出来ないのです。それは...色々な意味で危険なので」

「失礼ですが、我々を信頼していただかなければ、仕事にはなりませんな」

「おっしゃる意味はよくわかります。しかし、たとえわたしの正体を見ても、おそらくあなたはお信じにならない」

「どうも煙に巻くようなお話ですね」

「たわごとであればいいと自分でも思いますよ」

「しかし、そうでないから、そのような目立つ格好をあえてしてまで訪れた。大急ぎで汽車に飛び乗って」

「朝一番でね。まっすぐここへ」

「ふむ」

ホームズは戸惑ったようにパイプを吹かした。そして、ぼんやりとした口調で言った。

「ぼくには、あなたが独身で、ウェストサセックスの田舎で開業医を営んでいて、何かの研究をしていることくらいしか分からないが...」

「——なんですと！」

今度は、レインコートの男が飛び上がらんばかりに驚く番だった。

「尾けていたんだな？あらかじめ分かっている、わたしを尾行したのか」

「まあ、落ち着きなさい」

ホームズは穏やかに笑った。

「ごく簡単なことです。あなたの靴は泥で汚れている。この霧だが、道がぬかるむほどでもない。ならばロンドン以外から来たに違いない。あなたの言葉には南部なまりがあり、

その格好も田舎風です。朝一番の汽車に乗り、この時刻でロンドンへ到着するには、それほど多くの便はない。とすると、ウェストサセックスから来たと推定できる。さしずめチチェスター辺りでは？」

「あなたは時刻表を暗記しているのか」

「新しいのが出版されれば必ずチェックします」

「医者というのは？」

「その手袋と鞆です」

「これが？」

「あなたは常時その手袋を愛用しているようですね。指の腹の部分に染みがいくつも付いている。嵌め口は何度も出し入れしているので、少しばかりゆるんでいる。染みの色から判断すると、実験に用いる酸塩系の試薬でしょう。鞆はワトソン君と同様、往診用に使う物だ。

ステッキの石突の減り方からすると、ロンドンのような石畳の多い場所で使用したとは思われない。となると土の道が多い場所で働いていると思われる。靴底の様子もそれを裏付けている。

ついでに言うと、声と背筋の伸びた姿勢からすると、まだお若いようだ。少なくとも50を超えているということはないだろう。30代半ばかな。

帽子もズボンもあまり手入れを気にしていないと見える。あなたは独身で、せいぜい小間使いを雇っているくらいでしょう。さしずめ実験に夢中というところですか」

「それだけ指摘されたら兜を脱ぐしかありません」

感嘆の声を上げ、男は座り直した。

「では率直に言いましょ。わたしの名はケンプ。医学博士で、バードックという港町で開業医をやっています。わたしの趣味は——というより、生涯の仕事は——人間の可能性を医学的に追及することにあります。今回の件もそれに絡んでいるのです」

「あなたの研究成果を誰かが悪用すると？」

「ええ。ですが、『わたしの』ではありません。さる人物の『遺産』を借りて、その成果を拡大するのが使命だと心得ております」

「ほう。ご友人に研究仲間が？」

「ええ。...申し上げにくいのですが、その研究を行ったのは邪悪な人物で、わたしが引導を渡したようなものです。放っておくと、とんでもない事になりそうだったので、遺憾ながらわたしが警察に通報し、結果、犯罪の現場を押さえられ、命を落としました」

「それはいつの事ですか」

「去年の冬」

「研究とおっしゃられたが、どのような」

すると男は両膝に手を置いて黙った。彫像のように身を硬くしているが、内面の葛藤が小刻みに震える腕に表れている。我々は辛抱強く待った。

「——とても、あなたは信じますまい」

「さあ？言っていたかないと、なんとも」

「これはまったくもって...魔法のようなものです。あなたが最も嫌うたぐいの」

「別に嫌ってはおりません。無意味だと思うだけです」

マフラーの向こうで男はクックッと笑った。

「では、今日、認識を改めていただきましょう」

次に起こったことは、生涯忘れ得ぬ光景となるだろう。

男はやおら立ち上がると、ゆっくりマフラーを解いていった。次に、サングラスを外した。その時わたしはゾットした。というのも、下から現れたのはマスカレード——肌色に塗った人間そっくりの仮面で、無表情の正体はこれで分かった。顔と似ているだけに、かえって不気味さが増している。眼窩の中は真黒だった。しかし、わたしはてっきりアイマスクか何かだと思い込み、よほど用心深い——事実そうなのだが——人間だと思っただけで、本当の意味を理解していなかった。

男がシルクハットを脱ぐ——我々はアッと声を上げた。

帽子を取った空間に、あるべきはずの頭部がない！空っぽなのだ！

男は仮面も脱いだ...やはり顔がない。それで初めて、あの眼窩は最初から穴が開いていただけなのだと気づいた。

カツラも脱ぎ捨て、マフラーを外すと、首から上は完全に見えなかった。服だけが座ったままの状態、見ていると目がおかしくなりそう。

わたしは反射的に鏡を探していた。というのも、手品の出し物に人体消失というのがあり、美女が箱の中へ入って上から鋸で切られると、そこには何もないというのがあるからだ。種は簡単で、鏡の組み合わせであたかも居ないように見せかけるだけなのだが、まるで本当に消えたように見える。分かっているつも騙されるものだ。だから、今度のもご同様かと思いきや...やはり、そんな小道具は無かった！

今度のははっきりと苦笑が聞こえた。

「驚くことはありません」

手袋を脱いで、見えない手を振る。

「これがわたしの受け継いだ研究なのです。改良されて、より実用的になった」

「——素晴らしい！」

ホームズが叫んだ。頬が紅潮し、子供のように目が輝いている。

「まさに驚嘆すべき成果だ！まったく信じられない！」

「ええ。わたし自身も、いまだに信じられないくらいです」

いささか皮肉の混じった口調に冷静さを取り戻したのか、ホームズはいつもの冷淡な態度に戻っていた。だが、目はいまだ熱に浮かされたように何もない空間を見つめている。

見えない男——ケンプ氏は問い掛けるように腕を振った。

「昨年のイピングでの騒動をご存知で？」

「はて、どんな騒ぎが」

それについてはわたしの方がよく知っていた。ホームズも新聞を見たはずなのだが、フンと鼻を鳴らして素通りしたはずだ。

「例の幽霊騒ぎさ。透明人間が出るとかいう話だったが...まさか本当とは！」

「少し込み入った話になりますが、研究をしていた人物はグリフィスという名前で、元はわたしの友人でしたが、先ほど言ったように死にました。けれども、下男として雇っていた男が——マーヴェルというのですが——秘密を記したノートを保管していたのです。

マーヴェルは雇い主の死後、これが自分の物にならないかと散々頭を捻りましたが、元々学のない男、持て余した挙句わたしの所へ渋々持ち込んだのです。

わたしは彼と協議の上、研究によって利益が上がれば山分けする約束までしました」

「しかし、心変わりをされた」

ケンプは居ずまいを正した。手も頭もない人間が動くのは誠に奇妙なものだが、彼の声には誠意がこもっていた。

「あなたなら分かるはずだ。これが世に広まれば、どれほどの悪事が起こるか」

「見えない敵から身を守る手段もなければ、ひた隠しにしても秘密は暴かれ、銀行の金庫から金塊がことごとく消える」

「悪辣な人間が方法を思いつけば、なんだってやれます。事実、これを発明した当の本人は邪悪な本能が目覚め、結局自滅してしまいました」

「失礼だが、触っても？」

「ええ、ご存分に。最初からそのつもりで。ワトソン博士もご遠慮なく」

「では...



わたしは恐る恐る手を伸ばした。そして、何も見えない空間に、骨ばった何かが当たるとギクツとした。透明な手が握手し、自分の腕が自動的に振られるのが見えた。

ホームズは繊細な長い指で慎重に空間をなぞっていた。一见するとパントマイムのように、事情を知らない人が見たら、彼は気が狂ったか演劇の練習をしているに違いないと思っただろう。

「...面白い！実に面白い」

思わずホームズは呟いていた。

「あなたは少し運動不足ですな。脈拍が安定していない」

透明な手首を握って脈を測っている。

「医者仕事を放り出して研究に没頭したせいです」

苦笑交じりにケンプが答える。

ホームズは彼から離れると、掌をこすり、パイプに新しい葉を詰め始めた。

わたしが紙巻き煙草を勧めると、ケンプ氏は手袋を嵌め直し、受け取った。

「手袋がないと、自分の手がどこにあるのか正確に分らんのです」

フ〜ッと煙だけが漂う。宙に煙草が浮かび、何もないところから煙をくゆらせるのは、なんとも珍妙な眺めだった。

「これでも改良された方なんです。最初の頃は透明化が完全過ぎて、肺に届く煙まで透けて見えてしまって。胃の内容物や排泄物が消化器官を下ってゆくのは、実にグロテスクな眺めですよ。瞼も改良して、透明でも目をつむると暗闇が見えるようにしました」

「で、ケンプさん。これほど苦勞なさっているからには、元に戻る方法は...」

「残念ながら意図的に戻る方法はまだありません。しかし、ごく少量を服用する限り、時間が経てば自然に戻ります。わたしの場合は研究のし過ぎで、こうなってしまったもので。このことは信頼のおける使用人しか知りません。他人に知らればグリフィスの二の舞です」

「なるほど。あなたは危険を冒してロンドンへ来られたわけだ」

「ホームズさん。人間とは弱いもので、自分の正体がバレないと分かると、ちょっとした悪戯をやりたくなるものです。わたしも最初の頃は遊び半分で人を驚かしたりしたものが...次第にムラムラともっと過激な事をしたい衝動が湧いてくるのに気づきました。そして、これが十分に理性的でない人間の手に渡れば、恐るべき結果を招くことを理解したのです」

「ならば人類には早過ぎる成果ですな」

「そういうことです。わたしはここまで関わったことだし、自分の体を元に戻したいので研究を続けますが、余人に知られるわけにはいかない。...あなた以外は」

「なんですって？」

「——ホームズさん」

鞆の中から一冊の分厚いノートが現れた。

「これがその写しです。あなたなら不用意なことはしますまい」

さすがのホームズも、これには大いに戸惑った。彼は愛用の陶器のパイプを盛んに吹かし、

「かつてワトソン君も同意したことですが…」

と、しばしの沈黙の後で口を開いた。

「ぼくが犯罪者でないのは、この社会にとって幸運だと思うのです」

「まったくそのとおりです」

「しかし、あなたはあからさまに誘惑されている」

「犯罪捜査というものは、犯罪そのものを理解しなければ、出来るものではありません」

「確かにそうですが…」

「では、警察にこれを渡すというのですか？わたしの、この途方もない話を、いったい誰が真面目に受け取ってくれるのでしょうか？この秘密が公正な人間の手に渡ると保証してくれますか？」

「わたしの手からすり抜けるという可能性もゼロではありません」

「ワトソン博士はあなたの秘密を完全に守っておられる」

こう言われては、わたしもうやうやしくお辞儀するほかなかった。

「ホームズ。これほどおっしゃられるんだ。受け取っておくのが礼儀では？」

「実を言うと喉から手が出るほど欲しいんだ」

彼は苦笑いした。

「しかし、実際の捜査には使えまい。ぼくが消えたらレストレードたちが驚いて腰を抜かす」

「まったくくだな！」

ケンプ氏はまた仮面を被り、マフラーとシルクハットを着けると、腰を下ろした。

「で、肝心のマーヴェルのことですが、彼はもう透明化は？」

「まんまとやられました。厳重に保管しているつもりだったが、あの悪党め！いつのまにか水の入った瓶とすり替えられていた。うろたえたわたしが部屋中を探し回っていると、奴め、『ケンプさん、わたしが見えますか？』とすぐそばで言ったものだ。

わたしが呆気にとられていると、マーヴェルの奴、いきなりバケツに入れたペンキをぶちまけ、わたしをペンキまみれにしたんです。なんと悪賢い奴！おかげでわたしの姿はありありと見えるのに、彼奴は見えないままだ。

あいつはわたしの目の前で悠々と財布を盗み、引き出しにあった拳銃を取りました。こっちは何もできなかった。物が宙に浮いているだけで距離がうまく掴めない。あいつは考え抜いていたんでしょう、わたしが物を投げつけても平気で躲していた。

『こいつをぶち込まれたくなかったら、おとなしくしろ』

凄みのある声で言って、奴は銃を構えました。

『ご苦労さんよ。あんたの研究成果は、俺がたんまり使ってやらあ。せいぜい新聞を楽しみにしているんだな』

『おい、マーヴェル。グリフィスだって死んだんだ。うまくやれると思うのか』

『あんな間抜け野郎と一緒にしないでくれ。俺にもな、脳味噌ってものがあるのさ』

『いったい何をやらかす気だ』

『そいつはまだ言えねえ。だがよ先生、研究は続けてくれ。俺もいずれは元に戻るつもりだからよ。なあに、金の心配はいらねえ。たんまり稼いでやるぜ。

じゃあな、学者先生。せいぜい研究に精を出すことだ。怠けるとズドン！だぜ』

ふてぶてしく言うと、家を出て行きました」

「すでに何度か侵入していたとみえますな」

まぶたを半ば閉じてホームズは言った。

「調べてみると、気づかれぬよう慎重に鍵を開け、物色していたようです。預けた研究ノートはそのままにしてありました」

「ふむ！ 素養はないが、なかなかずる賢い奴だとみえる」

「何をしでかすかわかりません。元は小心な悪党だったが、透明になって本性を現したというか、人が変わったように傲慢な態度でした」

「それでケンプさん、事の始めからご説明願えますか？ もしマーヴェルが罪を犯すつもりなら、出来るだけ詳しく聞いておきたいのですが」

「もとよりそのつもりです」

我々は椅子に座り直し、ケンプ氏の不思議な話に聞き入った。いつの間にか日は暮れ、外は闇に塗り込められていた。ホームズはまったく夢中で、時々口を挟み、科学用語だの実験手順だのを根掘り葉掘り質問した。わたしにはチンプンカンプンで、何を言っているのかほとんど理解できなかったが、ケンプ氏の感嘆した様子から、ホームズが相当の境地に達しているのは分かった。

「ホームズさん、あなたは本当に驚くべき人だ。学界に席を置けば必ずや世界に名を轟かせたでしょうに」

「世俗の榮譽にはあまり興味ありませんね。ぼくはどちらかというとなら修道僧に近くて、己の知的好奇心を満足させることに重きを置いているのです。この商売も、そういう嗜好を満たすための方便ですな」

「しかし、その趣味と実益を兼ねた仕事が大英帝国や欧州各国を大いに助けている。真の達人は自分のためにやっているようでいて、利他的なところが多分にあるものです」

ホームズは手を振って否定したが、まんざらでもない様子だった。

「それはともかく、ある意味で気の毒なグリフィス氏だが、その彼のやり口を弟子はすっ

かり学んでしまったのですね」

「おそらくそれ以上でしょう。グリフィスには行き当たりばったりな面があって、感情的なままに行動し、あげく自ら墓穴を掘った。その一部始終を目撃しているのだから、彼の轍は踏むまいと思うはずですよ」

「厄介ですな。マーヴェルがロンドンへ来たのは確かなのですか？」

「まだ確認はしていませんが、いずれ何かが起こるのは間違いありません」

「田舎町に潜伏しているよりは活動しやすいでしょうね。ここなら空き家は無数にある」

「...さて、そろそろわたしはお暇しなくてはなりません。残念ですが、勝手知ったる我が家とロンドンとでは危険度が違います。正体がバレないうちにバードックへ帰りたいと思います。」

ところで費用ですが...

「ああ、結構。このノートだけで十分過ぎる報酬です。それに事件が起これば他の方面から依頼があるでしょう。お気遣いなく」

「薬が完成したら必ずご連絡します」

「成功をお祈りしています」

我々は硬く握手を交わした。

ケンプ氏は大きな荷物を下ろしたといった風情で、来た時よりも足取り軽く退出していった。

わたしは彼の無私無欲な態度に感服していた。

「良心的な医者もいたものだ！」

「すべからず科学者はケンプ氏を見習うべきだね。...さてワトソン、我々は待つとしよう。我らのマーヴェル君がどんな犯罪をやらかすのか期待しながら。その間、ぼくはこの思い掛けない贈り物をじっくり調べてみるよ」

早速わたしは文机に陣取り、今のやり取りを忠実にたどることにした。近頃は小型のタイプライターがあるので助かる。キーを叩く音を伴奏に、ホームズは鼻歌をうたいながら実験器具を並べ始めた。

「しかしねえ、ホームズ、この事件は本に出来そうもないね。こんな秘密を握っていると知られたら、ベーカー街へ人が殺到するぞ」

「ドアの前に長蛇の列だな。忌まわしいマスコミをお伴に。そうともワトソン、これはぼくらだけの秘密だよ」